高麗の装飾経 —宝積寺蔵、紺紙金銀泥経について—

装飾経とは、美しく荘厳（しょうごん）された経典類のことをいいます。高麗時代（918～1392）の装飾経は、今日相当数が遺存しており、中国や日本の装飾経の中にあって異彩を放っています。高麗の装飾経の中で、最も数が多く、代表的なものは、紺紙金銀泥経です。これが数百年の長い歳月を経た現在にあっても、なお書写当時のまばゆいほどのかがやきと貴族的な典雅な美しさを見せていることは驚異的であります。

さて、ここに紹介する京都大山崎の宝積寺（別名宝寺）の紺紙金銀泥経は、高麗写経の典型を示す名品であります。これは「妙法蓮華経七巻」と「阿弥陀経梵行品大悲心合部」（写真）とが、折本四帖の表裏両面に書写されており、その意味では珍しい遺例といえます。すなわち、法華経巻第一の裏面に巻第二、巻第三の裏面に巻第四、巻第五の裏面に巻第六、そして巻第七の裏面には、阿弥陀経が端麗に銀字で書写されています。ただし巻首の経典名は金字で書かれています。この法華経巻第一と阿弥陀経の表紙の見返しのところに、金泥の鉄線描と肥瘦線を巧みに使って、それぞれ釈迦説法図（写真）が描かれています。この見返絵は実に生彩に富んだ表現です。また、この見返絵にある金剛杵と輪宝とを繋いだ欄郭の縁取りは見事で、表紙の金銀泥宝相華唐草文の装飾とともに特記されます。そして、阿弥陀経の奥書によって、この装飾経が、至元31年（1294）忠烈王20年に、中正太夫宗簿令致仕安節と安州郡夫人李氏及び昌寧郡夫人張氏を功徳主として、書写されたことがわかります。この忠烈王代（1275～1308）は、写経が最もさかんであった時代で、国王発願の金・銀書の大蔵経（一切経）がつくられたり、またこのような貴族の発願になるものも多くつくられました。なお、前の二つの写経以外に、金光明経四巻が同時に書写されたことが、その奥書によってわかります。

この法華経及び阿弥陀経は、別の高麗装飾経「紺紙金字仏説大報父母恩重経」一帖とともに、現在黒漆地双鸞双孔雀草花文沈金経筥に納められています。この経筥は中国、日本のものと比べて、文様技法が異なり、またその文様は高麗仏画に描かれた金泥の装飾文様と近似しているので、高麗製の経筥かと思われます。

（林　進）

紺紙銀字阿弥陀経　梵行品大悲心合部
（表紙・見返絵・巻首）

季刊 美のたより №44
昭和53年 10月15日
発行　大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.